

富山大学平成 29 年度卒業論文

# ガラス工芸による芸術振興とまちづくり

富山大学人文学部人文学科  
社会文化コース 社会学分野  
学籍番号 11410178 山崎佳奈子

—目次—

第1章 問題関心…1

第2章 先行研究…2～5

- 第1節 富山市ガラスの街づくりとは…2
- 第2節 芸術文化振興によるまちづくり…3
- 第3節 富山市内にあるガラス関連施設…4
  - 第1項 富山市ガラス美術館
  - 第2項 グラス・アート・ヒルズ富山
  - 第3項 ストリートミュージアム・プロジェクト

第3章 調査概要…6～8

第4章 「ガラスの街とやま」の成果発信と認知…9～12

- 第1節 文化的産業の形成…9
  - 第1項 富山ガラス工房オリジナル素材
  - 第2項 他ジャンルとのコラボ
- 第2節 市民への普及と外部へのPR…9～10
  - 第1項 市民への普及
  - 第2項 外部へのPR
- 第3節 富山市ガラス美術館の役割…10～11
  - 第1項 富山市ガラス美術館と市内の他施設との連携
  - 第2項 富山市が『現代ガラス芸術』を推しているのはなぜか
  - 第3項 地元出身の作家のアピール
- 第4節 ガラスフェスタ 2017…11～12

## 第5章 富山市のガラス作家育成システム…13～15

### 第1節 独立前の作家の育成…13～14

第1項 富山ガラス造形所

第2項 富山ガラス工房

### 第2節 独立した作家への支援…14～15

第1項 富山ガラス工房

第2項 富山市の経済的支援「ガラス作家育成定着支援助成金制度」

## 第6章 富山市の作家育成の結果…16～20

### 第1節 国際派のガラス作家の活動…16～18

第1項 海外と日本のガラス工芸の違い

第2項 金沢のガラス工芸

第3項 改めて外から見る、富山のガラス工芸

### 第2節 地元・富山市で活躍するガラス作家…19～20

第1項 世界から見た富山のガラス工芸、市民から見た富山のガラス工芸

第2項 市民への普及活動の結果

第3項 富山ガラス工房から独立して

## 第7章 考察…21

## <参考文献・URL>…22

## 第1章 問題関心

平成 27 年 8 月、富山市ガラス美術館が市立図書館と共に中心市街地の再開発ビル「TOYAMA キラリ」内に開館した。従来の図書館とは違う、プリズムのような外観が特徴的な建築は市の新しい芸術文化拠点として、まちなか活性化の役割も期待されている。特にガラス美術館は、約 30 年間にわたる市の「ガラスのまちづくり」の集大成とされていて、国内の作家はもちろん、海外の作品も展示されているためか県外からのファンも足を運んでいるという。また市内には、ガラス作家育成の場や人とガラスの触れ合いを目的とする施設がある。

また、市街地から少し離れた呉羽丘陵には人材育成を目的とした、富山ガラス造形研究所や、作家共同の工房・作家の作品ショップやガラス制作体験等の普及啓発活動の拠点となる富山ガラス工房が集まって「グラス・アート・ヒルズ富山」と呼ばれる、ガラス文化の苗を供給する「ファーム」を形成している。これらの施設が連携することで、本来活動しにくいガラス作家が育成・自由に活動することができている。このような例は世界的に見てもまれだという。しかし、比較的新しくできた富山市ガラス美術館と富山ガラス工房などの「グラス・アート・ヒルズ富山」の施設とのつながりはまだ希薄であり、これから強化していくということが昨年度の実習で分かった。

本研究では、平成 20 年から始まったこの「富山市ガラスの街づくりプラン」という芸術文化振興がどのように富山市に貢献してきたか、今後は各施設がどのように連携して更なる富山のガラス文化的産業の形成がどのように進んでいくのかを追っていきたい。

## 第2章 先行研究

### 第1節 富山市ガラスの街づくりとは？

富山市は新しい文化の創出と地場産業育成という観点から、ガラス芸術の振興に力を入れている。富山市では、ガラスをテーマとした街づくりの将来へ向けての方向性を示すため、平成20年度に「富山市ガラスの街づくりプラン」を策定した。以下は市の動きをまとめたものである。

昭和 60 年	「富山市民大学ガラス工芸コース」開講
平成 3 年	全国で初めての公立のガラス専門教育機関「富山ガラス造形研究所」開校
6 年	「富山ガラス工房」を開設
8 年	「ガラスの街づくり事業」スタート
9 年	「個人工房」を開設
10 年	「グラス・アート・ヒルズ富山の基本構想」の策定
13 年	「富山市ガラス美術館基本構想」の策定
16 年	富山ガラス工房の増築・機能拡充
21 年	「富山市ガラスの街づくりプラン」の策定
22 年	富山ガラス造形研究所の学生向けの宿舎の整備
23 年	富山のガラス アートマネジメント事業開始 富山ガラス工房内にカフェができる
24 年	第2 ガラス工房オープン
26 年	まちなかミニ工房オープン 富山駅リニューアル
27 年	富山市ガラス美術館オープン
28 年	独立した作家のアシスタント助成金制度開始 オーストラリアとの作家同士の交流がスタート

富山市は、ガラスのまちづくりがもたらす富山市の未来像として、世界レベルのガラス作家が地域性豊かな作品を作り出し、それによって県外・国外からの観光客やアートビジネスに関わる人々が訪れるようになり、やがて芸術文化の薫り高い都市としての世界的な知名度を獲得するところを目標として挙げている。

具体的には、まちなかでは富山市ガラス美術館を中心として独創的で美しい作家オリジナルのガラス作品を扱うギャラリーやクラフトショップが軒を連ね、ストリートミュージアムに飾られた美しいガラスアートが芸術性の高い都市景観を創り出すことで地域を活性化し、市民の生活を豊かに演出させるというのだ。

その一方で、自然豊かな呉羽丘陵にある「グラス・アート・ヒルズ富山」には、富山ガラス造形研究所や富山ガラス工房以外にも、多くの個人工房やアトリエ、共同の新工房が建ち

並び、この地域で生み出された付加価値の高いガラス作品を、国内をはじめ世界中に届けることで、「グラス・アート・ヒルズ富山」がガラス文化の苗を供給する「ファーム」としての役割を果たす。また、それを支える若手作家の育成や独立支援も行われ、「グラス・アート・ヒルズ富山」が常に若い才能と活気に溢れた地域となることを目指している。

また、富山ガラス工房では制作体験も行っている。工房の所属作家が講師となり、市民や観光客に丁寧に指導することによって、初心者でも世界に一つだけのガラス作品を作ることができる。作家と市民との交流機会も増えることで、作り手との心の交流がモノの大切さや創作の面白さを教え、このような日々のなかで地域文化や自然風土と共鳴しあい、他の都市には見られない独自性がある芸術文化都市の完成を目標としているのだ。

現在、富山市ガラス美術館や富山ガラス工房、ストリートミュージアム・プロジェクトなどいくつものガラスに関連する施設や企画を市内で見ることができる。詳しくはこの章の第3節で説明する。

## 第2節 芸術文化振興によるまちづくり

宮崎（1998）は、「芸術文化の振興」はまちづくりにおいて欠かせないものだという。「芸術文化」は都市の品格を高め、風格のある、あるいは情緒豊かな人間都市をつくる。それには、伝統文化の保存や文化財を大切に保存・顕彰し、常に新しい芸術文化を育てていく必要があるそうだ。そのため、富山市では新たな都市文化を創造していくのにふさわしい環境の整備に取り組み、それを通して特色ある芸術文化都市をつくらうとしている。

全国各地の自治体で「ガラスのまちづくり」に取り組んでいるが、宮崎は富山市の推進する「ガラスのまちづくり」と他の自治体との違いを指摘している。多くの自治体においては、観光地の目玉施設あるいは個人的なコレクターにより開設された美術館などが主流である。また、美術館の収蔵品としてアールヌーボー・アールデコと呼ばれる時代のガラス工芸が中心である。

しかし、富山市は中心市街地に富山市ガラス美術館やストリートミュージアムがあり、自然豊かな呉羽丘陵には人材育成を目的とした富山ガラス造形研究所や、作家共同の工房・作家の作品ショップ、そしてガラス制作体験等の普及啓発活動の拠点となる富山ガラス工房が集まって「グラス・アート・ヒルズ富山」と呼ばれる「ファーム」を形成している。第1節でも説明したように、この「ファーム」はまちなかにガラス文化の苗を供給する役割を果たす。そして、この地域で生み出された付加価値の高いガラス作品は国内をはじめとする世界中に届けられる。また、富山市のガラスのまちづくりの中心となるのは「現代ガラス芸術」である。

### 第3節 富山市内にあるガラス関連施設

#### 第1項 富山市ガラス美術館

平成27年8月に西町南地区市街地再開発ビル「TOYAMA キラリ」内にオープンした。約30年間にわたる富山市の「ガラスのまちづくり」の集大成として、また国内にとどまらず世界中に現代ガラスアートの魅力を発信する場として期待されている。富山市ガラス美術館は、富山ガラス造形研究所等でガラス作家を輩出してきた、これまでの富山のガラスへの取り組みと波長を合わせるため、展示も現代ガラスに特化している。また、2F～4Fのオープン・スペースには富山ゆかりの作家たちによる作品が無料で展示されており、誰でも気軽に鑑賞することができる。2階にはミュージアムショップがあり、展覧会の図録をはじめ、ポストカード、クリアファイルなどのオリジナルグッズや、富山市在住の作家が制作した作品やガラス関連商品などが販売されている。富山市ガラス美術館のホームページ(以下「HP」と表記)で館長の渋谷良治氏は、これまでのガラスの街づくりの集大成として、国内のみならず、世界に現代ガラスアートが持つ魅力と未来に向けての可能性を発信していきたいと述べている。

#### 第2項 グラス・アート・ヒルズ富山

富山ガラス工房・富山ガラス造形研究所や個人工房などガラス関連施設が集まる呉羽地域の総称である。富山ガラス造形研究所はガラス作家の人材育成を目的とした施設であり、短期留学やアーティスト・イン・レジデンス等による国外のガラス作家との交流も活発である。

富山ガラス工房では、富山ガラス造形研究所の卒業生や工房の所属スタッフ、富山在住のガラス作家等の作品の販売をしている。また、新素材の開発による地域ブランドの創出やガラス作家の独立・富山市への定着支援の役割も果たしており、設備のレンタルも行っている。他にも工房内では、ガラス工芸の制作体験や制作現場の見学もでき、富山市民へのガラス芸術の啓発活動にも努めている。

#### 第3項 ストリートミュージアム・プロジェクト

まちなかの公園や建物にガラス作品を展示して、街全体をガラスのミュージアムに見立てるプロジェクトである。展示されている作品の中には、富山のガラス作家のものもある。富山駅から大手モールに至るルート上の様々な場所に作品が展示されていたが、一部の施設は富山市ガラス美術館設立時に、機能が重複するという理由から美術館側に吸収される形となり、終了している。

これらの施設やプロジェクトが連携することによって、「富山のガラス文化」を日本全国のみならず世界中に発信している。

### 第3章 調査概要

本研究では、富山市がどのようにガラス工芸産業を推進しているのか調べるため、富山市役所の企画管理部、「グラス・アート・ヒルズ富山」内の施設である富山ガラス工房および富山ガラス造形研究所に協力を依頼した。それぞれの調査の概要は以下のとおりである。

#### 【インタビュー1】

日時 2016年11月1日

場所 富山市役所5階

インタビューー 岸聡之さん、清水夏希さん（富山市企画管理部企画調整課）

主なインタビュー内容

- ・富山市が行っているガラスの街づくりの取り組みについて

#### 【インタビュー2】

日時 2016年12月5日

場所 富山ガラス工房、富山ガラス造形研究所、個人工房「アキコスグラス」

インタビューー 西川功一さん（富山ガラス工房事務局次長、営業企画部長）

廣瀬絵美さん（富山ガラス工房スタッフ ガラス作家）

本郷仁さん（富山ガラス造形研究所 主任教授）

吉田浩辰さん（富山ガラス造形研究所 事務長）

輪島明子さん（アキコスグラス代表）

主なインタビュー内容

- ・富山ガラス工房の活動について
- ・富山在住のガラス作家の実態、支援制度について
- ・富山ガラス造形研究所の役割について

次に、市内のガラス関連施設がどのように連携しているのかを調べるため、富山市ガラス美術館にインタビューをお願いした。

#### 【インタビュー3】

インタビュー調査はメール上でのみ行われた。

日時 2017年8月上旬

インタビューー 谷畑龍平さん（富山市ガラス美術館庶務係長）

主なインタビュー内容

- ・富山市ガラス美術館と市内の他のガラス関連施設のつながり

・富山のガラス工芸の芸術性

富山市ガラス美術館のインタビューの結果を受け、次の調査テーマとして「富山のガラス工芸の出身者のその後の活躍」について調べるため、現在金沢卯辰山工房とつながりのある富山大学人文学部 OB 内山大輝さんに紹介いただき、過去に富山ガラス造形研究所に助手として勤務していたガラス工芸作家の佐々木類さんへのインタビューを行った。

【インタビュー4】

日時 2017年9月13日

場所 金沢卯辰山工芸工房

インタビューー 佐々木類さん（ガラス工房専門員）

主なインタビュー内容

- ・佐々木類さんのこれまでの経歴について
- ・富山での活動内容と、富山で受けた影響
- ・金沢と富山のガラス工芸作家活動について
- ・金沢と富山の市民の「芸術」に対するアクションの違い

佐々木さんは1984年生まれ、現在金沢市在住である。平成18年度に武蔵野美術大学造形学部工芸工業デザイン学科ガラス専攻を卒業後、渡米し、ロードアイランド州にあるロードアイランド・スクール・オブ・デザインという美術大学のガラス科の修士課程を修了、その後、数々の賞を受賞し、教育施設で教員としても活動している。また、積極的に海外に渡航し、滞在制作等も行っているようだ。富山にいたのは富山ガラス造形研究所で助手として勤めていた、平成25年～平成28年の3年間である。助手の任期後、海外での滞在制作を経て、現在の職場である金沢卯辰山工芸工房で専門員として主に研修者の指導と工房の運営と管理をしているという。金沢に活動拠点を移したあとも富山にはよく訪れるようだ。

更に、富山ガラス工房を卒業し、現在富山市で活動中である、廣瀬絵美さんにも追加インタビューを行うことができた。

【インタビュー5】

日時 2017年11月15日

場所 富山ガラス工房

インタビューー 廣瀬絵美さん

主なインタビュー内容

- ・ 廣瀬絵美さんのこれまでの経歴について
- ・ 富山ガラス造形研究所・富山ガラス工房での活動内容と、その影響

廣瀬さんは 1990 年生まれで富山県富山市出身、現在富山市で活動中である。2011 年に秋田公立美術工芸短期大学の産業デザイン学科プロダクトデザイン分野を卒業。2013 年に富山ガラス造形研究所を卒業し、その後 2016 年まで富山ガラス工房のスタッフとして勤務していた。そして、今年の春から独立した。

このほか、ガラスフェスタ 2017 や、富山ガラス造形研究所が主催となったアーティスト・イン・レジデンス 2017 の展覧会など、各種イベントにも参加した。

## 第4章 「ガラスの街とやま」の成果発信と認知

### 第1節 文化的産業の形成

#### 第1項 富山ガラス工房オリジナル素材

富山ガラス工房では、新たな地域ブランドの確立と富山ガラス工房独自の特色を持たせるため「越碧」と「越翡翠」というオリジナルガラスを開発した。富山ガラス工房のHPを見ると、「富山ガラス工房オリジナル 越翡翠硝子」というページがある（富山市ガラス工房2018）。見てみると、越翡翠の説明や商品、またリンクから飛ぶことで更に詳しい開発の経緯等について書いてある。富山県のガラス作家であれば、工房所属ではなくても了承さえあれば使用可能だという。客からの要望があれば、これらの素材を使った作品を作成し、また、富山ガラス工房内やHP内でも「越碧・越翡翠」作品を展示販売している。



【越碧】



【越翡翠】

\*富山ガラス工房（2018）より

#### 第2項 他ジャンルとのコラボ

富山市は日常生活の中にも富山のガラス作品を取り入れ、市民に馴染んでもらうという目的で、市内の料理店に富山のガラス作家の作品を置いている。平成23年から始まった取り組みで、年ごとに作品を置く店は異なる。作家と店側が話し合いをして、こういう食器がいいとオーダーを受けて食器類をつくるという。

他ジャンルとのコラボということで、過去には華道協会とコラボして共同作品を制作したり、宇和島市とコラボし、名産品であるパールを使ってアクセサリを作ったりするという。

このようにガラス作家の仕事を確保する目的もあるが、他ジャンルとコラボし需要を増やすことで、富山のガラス工芸の可能性を広げ、より多様性を持った自由な文化的産業が形成されるのではないだろうか。

## 第2節 市民への普及と外部へのPR

### 第1項 市民への普及

市内の中心市街地では、富山市ガラス美術館をはじめとしたガラス関連の施設が集まっている。富山市ガラス美術館の他には、ストリートミュージアムや富山駅の一部フロアや市電乗り場の壁の建築素材の中に見ることができる。西川功一さんは、ガラス関連施設は市民の税金を使って建設しているため、どうして市がガラス工芸を推しているのか理解してもらうのも仕事のうちだと語ってくれた。

平成27年8月に西町南地区市街地再開発ビル「TOYAMA キラリ」のなかに現代ガラスアートの展示を中心とした「富山市ガラス美術館」ができた。富山ガラス工房とは、入館料や商品の割引サービスを実施したり、試験的に富山市ガラス美術館・富山ガラス工房間を無料で往復バスを走行させたりと、連携して富山のガラス産業を盛り上げている。しかし、富山市ガラス美術館ができる前の平成26年度9月以降の富山ガラス工房の入館者数と、できてからの平成27年度の9月以降の富山ガラス工房の入館者数には特に大きな変化はないという。

このことから、富山市ガラス美術館と富山ガラス工房の連携がまだ上手くいっていないことが分かる。今後の市のガラス工芸推進の課題の一つとなるだろう。これについては次の節の第1項でも述べている。

### 第2項 外部へのPR

富山のガラス工芸は市内だけにはとどまらない。東京の展示会に出品したり、民間のショップやギャラリーの場所を借りたり、発表の場を設けて販売してもらっている。また、県外の民間宿泊施設と連携し、施設内で富山のガラス食器を使用してもらったり、ショップで販売してもらったりしている。

他にも県外・市外から富山に観光に来た人たちに富山のガラスを見てもらうために、平成28年の夏に駅前のホテルの1階ロビーに大きなショーケースを作ってもらい、そこに富山のガラス作家の作品を置いてもらっている。

## 第3節 富山市ガラス美術館の役割

この節は【インタビュー3】をもとにしている。

富山市ガラス美術館へのインタビューは、「他施設と連携して、何らかのイベントを行った、もしくは行う予定がある。または、ガラス芸術文化振興において協力体制にあるかどうか」「富山市が『現代ガラス芸術』を推しているのはなぜか」を主な質問として、メールにて問い合わせしてみた。

#### 第1項 富山市ガラス美術館と市内の他施設との連携

富山市ガラス美術館-富山ガラス工房は、両施設間の期間限定での無料バス運行、富山市ガラス美術館の来館者と富山ガラス工房で買い物をした客に対する相互の割引サービスを行っている。それら以外にも具体的なやりとりをすることはあるのかと問い合わせたところ、あまり連携していないように感じられた。この、「連携がうまくいっていないように感じられた」というのはあくまでも個人的な見解である。

また、他にも、ガラス関連施設との交流や活動を行っているそうだ。

なぜ、富山市ガラス美術館と富山ガラス工房を含む「ガラス・アート・ヒルズ富山」が連携しにくいのか。それは各施設の役割の違いにあるのではないだろうか。富山市ガラス美術館のHPに書かれてあったが、「ガラス・アート・ヒルズ富山」をガラス作家の人材育成及びガラス作品の制作・体験拠点とし、「富山市ガラス美術館」をすぐれた芸術作品の鑑賞や新たな造形表現の創造と発信の拠点として位置づけている。それぞれ役割が確立しているのであれば、敢えて交流する必要性はないのかもしれない。

#### 第2項 富山市が『現代ガラス芸術』を推しているのはなぜか

富山市は新時代の教育と芸術文化、産業の振興を目指し、ガラスの街づくりを市の政策のひとつと位置づけ、新たなガラス文化の創造に取り組んできた。

現在、富山市ガラス美術館では、

(ア)主に1950年代以降に制作された、現代ガラス美術発展の流れに沿った国内外のすぐれた作品

(イ)次世代のガラス美術の方向を予見させる革新的で質の高い作品

(ウ)ガラス美術を歴史的・体系的に整理し、美術史上に位置づけるうえで重要と思われる作品

(エ)ガラス美術以外の造形分野で、“透き通る”というコンセプトにおいて特にすぐれており、ガラス美術の発展の参考となりうる作品

(オ)その他、美術館が収蔵するのにふさわしい資料等を作品収集の基本方針として位置づけている。

また、芸術文化と「まちなか」の魅力創出の拠点として、現代ガラス芸術を軸とした多様な芸術表現と新たな魅力を紹介し、人々に芸術との出会いの場を提供するため、ガラス美術作品の展覧会活動を行っていきたいと考えているという。

### 第3項 地元出身の作家のアピール

富山市ガラス美術館の展示テーマによって「富山県出身のガラス作家」の作品を優先的に飾ることはないが、富山ゆかりの作家によって制作されたガラス作品を紹介する事業として、“グラス・アート・パサージュ プロジェクト”を実施している。このプロジェクトは、富山ガラス造形研究所や富山ガラス工房で作品制作や作家活動を行った後、日本各地で活動する作家に依頼し制作されたガラス作品を展示紹介する事業で、「TOYAMA キラリ」内に富山ゆかりのガラス作家の作品を展示している。

### 第4節 ガラスフェスタ 2017

8月26・27日には年に一度の無料体験祭として、富山ガラス工房でガラスフェスタ 2017が行われた。ガラスフェスタでは無料制作体験・富山の作家による、吹きガラス技術選手権・他にも富山市ガラス美術館・富山ガラス工房間の無料シャトルバス特別運行・フリーマーケット・商品の割引が行われていた。同日に、ファミリーパークで行われたイベント「悠久の森 2017」がファミリー向けイベントということもあってか、ガラスフェスタも家族連れが多かった。また、吹きガラス技術選手権では司会が参加選手は全国各地から富山に集まって作家活動をしているということを何回も強調して言っていた。

## 第5章 富山市のガラス作家育成システム

### 第1節 独立前の作家の育成

#### 第1項 富山ガラス造形研究所

ここでは第2章第3節でも述べた通り、未来のガラス工芸作家を育成する役割を担う。インタビューの吉田浩辰さんは、教育機関である富山ガラス造形研究所の近隣に、作家を支援する役割を果たす富山ガラス工房や、芸術の発信を担う富山市ガラス美術館といったガラスに関連する施設がこのような近距離に位置するのは、世界的に見ても稀だと言った。つまり、富山市はガラス工芸の勉強に打ち込むのにはとても恵まれた環境なのだ。また、海外との交流も盛んで交換留学や外国人教師の招致、アーティスト・イン・レジデンス事業の主催でもある。アーティスト・イン・レジデンスとは、国内外で活躍するガラス作家を公募し、6週間に渡り富山ガラス造形研究所に滞在しながら制作に取り組んでもらい、その成果である作品を通して、国内外に富山の魅力を発信してもらおうという企画である。完成した作品は富山市ガラス美術館ギャラリーに短期間展示され、作家本人によるアーティストトークや富山ガラス工房での公開制作も行われる。

卒業生の進路としては独立や工房・会社に所属、また教育機関に就職してガラス工芸を教えている人もいる。富山ガラス造形研究所によれば、平成27年度の3月末で、卒業生はのべ462名になる。そのうち「造形科」から「研究科」へ進学した66名を除くと正確な卒業生の人数は396名となる。卒業後の動向として、富山県内で活動している卒業生が69名、県外でも何かしらの形でガラス作家として活動中なのが220名、残りの107名についてはその他や不明である。

#### 第2項 富山ガラス工房

富山ガラス工房では、「ガラスのまちづくり」の一環としてガラス作家育成を行っている。作家として独立するために必要な技術はもちろん、営業のノウハウを学んだり、独立に向けて資金を貯めさせたりすることが目的だという。富山ガラス造形研究所よりも、「独立」という目標に特化して支援しているといえるだろう。2016年12月時に所属していたスタッフは計15名。内、富山市出身者は廣瀬絵美さん1名だけであった。あとは、他県出身者が12名、韓国から1名、ノルウェーから1名となっていた。県内・市内出身者よりも圧倒的に他県からの作家志望者が多い。

工房所属作家は基本的に一日中ガラス工芸の制作をしている。工房からの注文やショップに出す作品を作っているが、材料費は工房持ちである。また、ガラス造形に必要な溶解炉などの設備は工房にあるものを使える。また就業時間後に居残り、工房の設備で自分の作品を作る作家もいる。当然ながら、その場合の材料費と残業代は出ない。

富山ガラス工房にいられるのは3年から5年と決まっていて、西川功一さんは、特に工房に所属している間に自分の顧客、固定客を見つけて欲しいと語った。例えばガラス作家が

活動資金を出しながら生活していくのはとても厳しいことである。しかし、仮に海外の富裕者が一人、ある特定の作家さん一人につけば、その作家は一生食っていけるとのことだ。工房には所属作家や富山県在住の作家の作品を売るショップがあるが、これは工房としての利益をあげるだけではなく、作家と客の出会いの場としての役割も持つ。

## 第2節 独立した作家への支援

### 第1項 富山ガラス工房

ガラス作家の独立には、大きな初期投資と継続的な仕事が必要不可欠である。

富山ガラス造形研究所や富山ガラス工房を卒業し、独立した後も富山ガラス工房とのつながりは消えない。富山ガラス工房では、作家が独立した後も支援する。その一つの例として、工房内のショップには独立した作家の作品も置いてある。また、所属作家はもちろん、独立した作家にも仕事を割り振っている。企業等からの大きな注文があったとき、当然工房所属の作家だけでは手が足りない。そういった、単純に人手が欲しい時はもちろん、例えば花瓶の注文が入ったときに、花瓶の制作が得意な作家にデッサン画や見本を作らせたりする。このようにして、富山ガラス工房は個人作家と依頼主の窓口になっている。しかし、あくまでも所属作家と個人作家両者ともに仕事を与えているため、良いチャンスとしてありがたいと思っているが、平等であるため工房にはどの作家も作品を少数しか置いてもらえないということに対し、不平等でも一人の作家を大きく取り上げてくれるようなプライベートのギャラリーが市街地に5件くらいあって、それをめざして首都圏からお客様が来られたら楽しそうだと個人作家の輪島明子さんは語ってくれた。「富山市」が主体となってガラス工芸品を紹介し、販売しているところはあるが、民間で経営されている店はあまりない。今後、市の動きに伴いガラス工芸ビジネスが富山で活発化したら、ガラス工芸作家自身の個性も注目されるようになるかもしれない。

また、自力で窯を構えることができない作家への支援として、富山ガラス工房内には、「創作工房」という設備レンタルが手ごろな価格でできる施設が入っている。この「創作工房」を利用できるのはプロの作家のみであり、アマチュアには貸し出ししていない。あくまでも目的は「プロが作品を作るため」だからだ。富山県内の作家はもちろん、県外の作家も借りに来るという。このような施設を東京で借りるとなると、2倍～3倍はかかるという。県外からくる作家のために、工房内で宿泊して制作することもできるようになっている。

現在、富山ガラス工房は北陸銀行上海支店を介して中国に富山のガラス工芸を売り込むなどして、海外への販路拡大に向けて準備をしている。今後更に東南アジアへの販売ルート開拓のためシンガポールのバイヤーに売込み中であることも西川さんのインタビューから分かった。

## 第2項 富山市の経済的支援「ガラス作家育成定着支援助成金制度」

富山市はガラス工芸作家支援を目的としたアシスタント（若手作家）人件費助成制度を2016年度から開始した。富山ガラス造形研究所を卒業した学生の就職先の一つとして独立した作家のアシスタントというものがある。しかし、独立した作家もアシスタントに給料を払えるほど儲かってはいない。この制度のメリットは学生の就職先を確保し定着をはかることと、個人作家がアシスタントを雇いやすくなるという2点が挙げられる。

アシスタントを1年間以上雇用する場合、各工房月額賃金の二分の一ただし月額3万円を上限とし、最長3年間支給する。作家からもアシスタントの若手作家からも大変好評だという。

個人作家である輪島明子さんに助成金制度について聞いてみたところ、「すごく助かっている」という答えをもらった。しかし一方では、アシスタントの生活に変化があって、あまり手伝いに来られない時期があったときにアシスタントを変えたかったが、前例がないため断られたということがあったそうだ。作家・アシスタントの都合や要望に対し、どのように対応し変化していくのか、また、どのような成果を挙げるのか。今後とも注目されるだろう。

## 第6章 富山市の作家育成の結果

第5章で述べた、富山市のガラス作家育成システムによって、どのようなガラス作家が生まれたのかを調査するため、【インタビュー4】、【インタビュー5】を実施した。

### 第1節 国際派のガラス作家の活動

この節では、佐々木類さんへのインタビューで分かったことについて述べる。第3章第1節でも説明したが、佐々木さんは過去に3年間、富山ガラス造形研究所の教員助手として勤務していた。任期後、海外での滞在制作を経て、現在の職場である金沢卯辰山工芸工房で専門員として主に研修者の指導をしている。佐々木さんの作品は工芸品よりも芸術品が多い。(Rui Sasaki 2018) 小さい作品も制作しているが、佐々木さん個人のHPでは大きな作品も紹介されていた。下の画像は佐々木さんの作品の一部である。



\*Rui Sasaki (2018) より

### 第1項 海外と日本のガラス工芸の違い

佐々木さんはよく海外の滞在制作（アーティスト・イン・レジデンス）で大きい作品を作っている。これは、日本だと大きい作品を作りづらいという事情があるからだ。例えば、レンタル工房で大きな作品を作るとする。そうすると、周りでは他の作品を作っている作家がいるので、気を遣わなければならない。また、大きい作品を作るとなると、助手も人数が必要となり、人件費もかかってくる。

海外には、アメリカの例だと、ガラス文化や教育も日本と比べて栄えて、教育機関の選択肢が幅広いので自分にあつたところ・自分の学びたいものを選べる。また、滞在制作（アーティスト・イン・レジデンス）も広まっていて、一人では作れない大きな作品等も、プロの方がアシストしてくれるおかげで、作品の可能性が広がる。

### 第2項 金沢のガラス工芸

現在、佐々木さんが勤めている、金沢卯辰山工芸工房は「陶芸」「漆芸」「染」「金工」「ガラス」の5工房からなる。主な金沢の伝統工芸である「陶芸」「漆芸」「染」「金工」を基に、「ガラス」は工房開設時に新たな伝統としていく分野として加えられたのだという。佐々木さんは4つの異素材に囲まれたこの環境はガラス工芸にとって、新たな刺激を与えるものとして「とてもいい環境」だという。研修者の中にはガラスを金属や陶芸と合わせた作品を作る人もでてきているらしい。また、金沢でもガラスを目的に見に来られる方もいる。金沢にもガラスが根付いてきているのだ。

金沢には、それまでなかった組み合わせや、目の肥えた、違う分野の人間から作品を見てもらえるため、新しいチャンスを得やすいと佐々木さんは言う。また、金沢には元々文化的に活発で、市民の方からも理解があり、各施設が、例え異なるジャンルの作品を扱っていても、連携がとれている。伝統工芸に興味がある人も、現代アートに興味がある人も、互いに違う分野に興味を持ってもらえる。つまりは、ガラス工芸に至るまでの窓口が広いのだ。そのような状況を佐々木さんは「融合的」と評した。

### 第3項 改めて外から見る、富山のガラス工芸

佐々木さんに、「外から見た富山」について尋ねてみたところ、「富山はガラスに特化している」と答えた。専門性が高く、またガラスに関してここまで、国際的に開かれた都市はないという。富山ガラス造形研究所には、これまでに2名の外国人教師が常駐していて、また、留学生も多く受け入れていたので、日本にいながらも海外とのつながりがあったそうだ。これは滅多にないことだという。先ほど、日本では大きい作品を作りづらい環境にあるという話があったが、富山ガラス造形研究所は別だったという。大きい作品の制作は、先生や助手の制作を学生がアシストし、先生や助手が互いに協力することもあり、自身がアシスタン

トを経験することもあった。そういうチームワークを学ぶこともあれば、ワークショップに参加し、多くの講義に出ることもあり、知らなかった作家との出会いもあった。また、全然違う分野に携わることもあり、様々なチャレンジができる環境であったようだ。

佐々木さんは、海外では富山はガラス工芸と芸術という点ではかなり有名なので、「ガラスの街とやま」というブランディング化は成功しているのではとおっしゃっていた。

しかし、富山市民からの認知度は低いのではという私の問に対し、佐々木さんも同意し、富山ガラス造形研究所に勤めていた当時、工房が24時間稼働して電気がつけっぱなしであること等、市民の方からあまり理解をされなかったという話を聞いた。また、富山は今、文化を築きあげている最中なのではないかという指摘を受けた。税金を使って施設を運営しているため、市民からの理解はどうしても必要となってくる。その中で、富山市ガラス美術館がよいきっかけになるのではないかという話が出た。富山市ガラス美術館は「TOYAMA キラリ」という多目的ビルの中にあり、他の用事で来た人が、ついでに富山市ガラス美術館の方にも興味を持ってくれやすいのではと述べてくれた。

例えば富山市民は知らなくても、「富山市にすごいガラス美術館が出来たらしいよ」と噂になるだけで市の人々は多分誇りにも思うのではないかと、そういう意味では非常に大きな役割をしているのではないかという考えを教えてくれた。つまりは、外からの知名度を高めることで、市民の方々にも、富山のガラス工芸と芸術は、なんとなく推進しているのではなく、世界的にも高い評価を得ているという事実を見てもらえるようにする。そして、もっと市民の方々にも興味・理解を示してもらえるようなイベントや行事を組んでいかないといけないのではないかとおっしゃった。

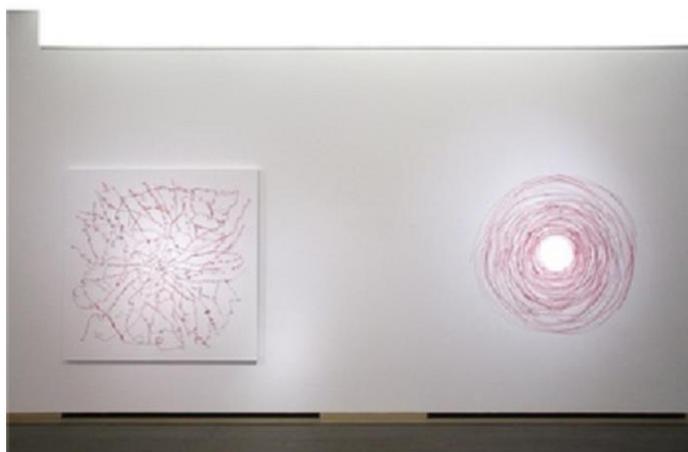
富山市は他のガラスを推している自治体よりも行政の力の入れ方が違うという。政治サイドの協力があるということは特別なことだそうだ。また、富山市を参考として、秋田県に秋田市新屋ガラス工房が出来たそうだ。この工房の付近には秋田公立美術大学が平成25年に開学し、若いガラス作家が秋田で独立を目指し、日々創作にいそしんでいる。

「ガラスの街とやま」プロジェクトが始まってから約21年でここまで世界的に有名になるのはすごいことだ。成果はすぐには出てこないもので、長い目で見るのが大切なのではないのだろうか。このように佐々木さんは語ってくれた。

また、「ガラス」というきっかけがなければ、富山のことをずっと知らなかっただろうとも言っていた。富山に移住する前までは、富山は北陸三県のうちの一つという認識しかなかったが、富山ガラス造形研究所に勤めてからは、ガラス以外の面でも富山の良さを知ることができたそうだ。今では、佐々木さんにとって富山は思い出がたくさんある、大好きな土地だそうだ。第4章第4節でも少し述べたが、ガラスがきっかけで富山に移住してくる人もいる。「ガラス」は富山を外から認知するための材料にもなっているといえるのではないだろうか。

## 第2節 地元・富山市で活躍するガラス作家

この節は、富山市出身のガラス作家である廣瀬絵美さんへのインタビューをもとに構成される。廣瀬さんは主にケインワークという、色を付けたガラスの棒（ケイン）を使って模様をつける技法で作品を制作している。下の画像は廣瀬さんの作品の一部である。



\*富山ガラス工房（2018）より

### 第1項 世界から見た富山のガラス工芸、市民から見た富山のガラス工芸

廣瀬さんによれば、富山で「ガラス工房にいます」と言っても、「どこやっけー？」というような反応を返されるだけであるが、アメリカに行ったときに、「一応ガラスが盛んな所だったんですけども富山からきて富山生まれだよ」と伝えたところ、「すごい、サイコーだね」「富山サイコーじゃん」と羨ましがられたそう。このように富山市は、ガラス工芸業界からは、国際的にみても評価が高い。実際、富山ガラス造形研究所主催のアーティスト・イン・レジデンスはとても人気が高いという。今年は17ヶ国29組30名の応募があった。その中から選ばれるのはもちろん1名だけである。

そのわりには、地元からの認知度は低い。この章の第1節第3項でも述べたが、市民のガラス工芸に対する反応は淡泊である。ガラス関係者と富山市民の温度差が生じてしまっているのだ。

これから「ガラスの街とやま」を進めていくために、市民の理解がどうしても必要になる。市民の理解を深めるためにはどうすればよいかと質問したところ、廣瀬さんは次のように答えてくれた。詳しくは次の項で述べる。

### 第2項 市民への普及活動の結果

第3章第2節等にも書いてある通り、行政・富山ガラス工房・富山ガラス造形研究所・富

山市ガラス美術館は連携しながら、市民の理解を得ようと活動している。しかし、インタビューで聞く限りは、その成果は出ていないように思えた。そのことについて廣瀬さんは、「これからなのではないか」と答えてくれた。この章の第1節第3項でも同じようなことを佐々木さんも言っていた。佐々木さんは富山市ガラス美術館が市民に興味を持ってもらえるきっかけの一つになるのではと話してくれたが、廣瀬さんは富山ガラス工房での制作体験について話してくれた。3年前から、富山ガラス工房では、小学校の卒業記念品のペーパーウェイトを作る体験会を行っているという。他にも、教育普及事業として、平成27年度より市内の小中学生を富山市ガラス美術館に招待する事業を行っているそうだ。それを始めたことによって、制作体験をした子供たちが、成長していくうちに、「小学校のときにやったことあるよー」というふうに広まっていくのではないかと語ってくれた。

### 第3項 富山ガラス工房から独立して

廣瀬さんは今年の春から独立し、今年のアートフェア富山では準グランプリを授賞した。制作はシェアさせてもらっている個人工房内のアトリエで火を使わない仕事や作業を行い、窯などは創作工房でレンタルしている。独立してからは、仕事をとってくるのも、制作スケジュールを組むのも、全部自分で、しかも作品の制作と同時にやらなければならない。工房は所属作家に独立するための力をつけてもらうことを目的の一つとしているが、廣瀬さんは、富山ガラス造形研究所や工房で学んだこと全てが今の活動に活かしているという。制作においてもだが、デザインの打合せの仕方も一人だったら絶対に分からなかっただろうと言っていた。今でも創作工房のレンタル以外にも、上司や同期、後輩への制作の相談に訪れたり、近況報告をしたりするという。そういった場があることはすごくありがたいそうだ。

また、廣瀬さんは色んな分野の作家と交流したいと語ってくれた。ガラスのみというのは非常に閉鎖的に感じるらしく、ガラスと他の素材を組み合わせ、新しい可能性を発見したいそうだ。

## 第7章 考察

本研究で宮崎(1998)の研究をもとに、現在の「ガラスの街とやま」がどうなっているのかについて調査した。結果、作家育成から独立支援、新たな地域ブランドの確立や他ジャンルとのコラボといった産業の形成、市内外へのPR活動、そして富山市ガラス美術館による現代グラスアートの鑑賞・発信と多岐にわたって活動していることが分かった。

富山はガラス芸術においては世界的に有名で注目されている一方、富山市民からの理解はまだ少ないと感じられる。しかし、二人のガラス作家は長い目で見ると必要があるという。確かに、周囲の理解は一朝一夕で得られるものではないのかもしれない。苗が根付き実を結び、市民に「いつもそこにあるもの」として認識されるようになるには、まだまだ長い時間が必要になるだろう。

また、それに関して、本研究では、いくつかの問題点・課題が浮かび上がってきた。第一に、第4章第3節第1項で扱った、「グラス・アート・ヒルズ富山」と富山市ガラス美術館の連携がうまくいっていないという課題である。この、「連携がうまくいっていない」というのはあくまでも個人的な見解である。それぞれの施設で担う役割が異なり、施設間が遠いとはいえ、どちらも富山市のガラス関連施設である。佐々木さんは、金沢市は芸術関係の施設間の連携がとれていると話してくれた。富山市も観光客や市民が両施設の行き来がしやすいように、イベントに合わせて無料バスを運行している。これからの展開にも注目したい。第二に作家個人の要望が通らない・通りにくいという問題である。「本当は大きい作品にも挑戦したいが、設備や予算の関係上難しい」などといった悩みや不満は、作家自身の個性を活かすためにも、向き合っていくべき問題になり得るだろう。また、金沢と違いガラスに特化したことで、高い評価を受けるようになったが、その一方で異素材との交流が乏しく、作品を作るうえで、どこか閉鎖的になっている面もあるという。

それぞれの施設が協力することによって、本来活動しにくいガラス作家が育成・自由に活動することができるようになる。このような施設が集まって、連携しているのは世界的に見てもまれであり、ガラス工芸作家にとってはまさに最高の環境といえるだろう。

富山で活動するガラス工芸作家にはサポートとして、独立後も工房が仕事や設備の提供をしてくれる。また、ガラス作家育成定着支援助成金制度や創作工房といった支援は、もともと余裕のないガラス作家活動に大きく貢献していることも分かった。育成から独立後の支援までしてくれる、ガラス作家にとって恵まれた環境である富山は、世界的に高い評価を受けている。また、国際交流も盛んで、作家も世界とのつながりを感じ、見聞が広がることで、更に創作意欲が増すことだろう。

富山市ガラス美術館に展示されている作品はもちろん、ストリートミュージアムや富山駅のフロアシャンデリア、市内レストランの食器からも富山のガラス作家たちの確かな存在を感じることができる。そして、市民の理解を得られるようになれば、先ほど述べたような作家の不満解消や更なる文化の発展をしやすいだろう。そうすれば、富山市は名実ともに独自性を持つ芸術文化の薫り高い都市になるのではないだろうか。

<参考文献・URL>

- ・アートフェア富山 2017・アートアワード (2018年1月10日取得)  
<https://artfairtoyama.jimdo.com/>
- ・秋田市新屋ガラス工房 (2018年1月10日取得)  
<https://www.araya-glass.akita.jp/>
- ・渋谷良治 (1997) 「作家が語る ガラスの見方, 楽しみ方」『セラミックス』32(3)、  
pp. 208-210
- ・土地 満 (2016) 「チャレンジ 富山の文化芸術とまちなかの新たな魅力創出の拠点 富山  
市ガラス美術館」『北陸経済研究』(441)、pp.36-39
- ・富山市 ホームページ -ガラスの街づくり- (2018年1月10日取得)  
[http://www.city.toyama.toyama.jp/kikakukanribu/kikakuchoseika/glass\\_town\\_toyama/glasscity.html](http://www.city.toyama.toyama.jp/kikakukanribu/kikakuchoseika/glass_town_toyama/glasscity.html)
- ・富山市ガラスの街づくりプラン (2009作成) (2018年1月10日取得)  
[http://www.city.toyama.toyama.jp/data/open/cnt/3/15972/1/master\\_plan.pdf](http://www.city.toyama.toyama.jp/data/open/cnt/3/15972/1/master_plan.pdf)
- ・富山市ガラス美術館 (2018年1月10日取得)  
<http://toyama-glass-art-museum.jp/>
- ・富山ガラス工房 (2018年1月10日取得)  
<http://toyama-garasukobo.jp/>
- ・富山ガラス作家協会 (2018年1月10日取得)  
<http://toyama-glassartists.com/>
- ・宮崎茂 (1998) 「シリーズまちづくり(富山市)『顔』の見える『文化のまちづくり』--「ガラスのまち・富山」」『住民行政の窓』(188)、pp. 28-36
- ・Rui Sasaki (2018年1月10日取得)  
<http://rui-sasaki.com/home.html>